



## 【農業列島】 産地ルポ

### ナス

熊本県 JAたまな

# さらなる省力化を 「P C 筑陽」

## の全面導入で

(編集部)



### 「P C 筑陽」を導入した 20代の田中賢将さん

父親の早逝により18歳で就農した天

水町の田中さんは、令和元年で9年目  
のまだ27歳。苦労を重ねながらも個性  
を持った取り組みをしたいというチャ  
レンジ精神で、各地のナス栽培を訪ね

て得た知見をもとに、最新の施設栽培  
を取り入れてこられました。6m間口  
の70mハウスを24棟、総面積40aでの

栽培です。中でも日射量の増減で養液  
灌水を自動制御するオランダ型のシス  
テムは日本で初めての導入だとか。

ナス栽培の肝である水管理がハウス  
内環境に合わせコントロールできるほ  
か、早朝から気温を徐々に上げ、日中

13〜14時にハウス内が30℃近くなる設  
定にすることで、ナス栽培に適した秋  
と春の環境を1年中ハウスに再現でき  
るようにされています。

炭酸ガスの活用、自動カーテンなど  
も「プロファイナダー」でハウス内の状

況を把握し、管理。実際、田中さんの  
ハウス内は、天井の高さも相まって、  
湿度がこもらず快適な環境が維持され  
ています。

「P C 筑陽」は前年試作し、2019  
年作から100%に切り替わりました。  
メリットとしては「ホルモン処理不要」  
という安心感が一番大きく、研修生の  
作業効率向上にも寄与しています。こ  
れまではきれいな花でなければ次の花

↑草勢の変化に対応し3本仕立てのチドリ植えに工夫  
された田中さんの「P C 筑陽」。



↑草勢の変化に対応し3本仕立てのチドリ植えに工夫された田中さんの「P C 筑陽」。

### 地域概況

#### J Aたまなのナス栽培

玉名管内は、熊本県の北西部に位置し、有明海に面した県内有数の平坦水田地帯です。中央に阿蘇外輪山を水源とする菊池川が南北に貫流し、水田地域では、水稲とミニトマトやイチゴ施設園芸が盛んです。金峰山・小岱山の山麓地域および山地丘陵の中間地域では、果樹・野菜・水稲を組み合わせた複合経営が行われています。

玉名管内におけるナス栽培の歴史は古く、戦後まもなく夏秋期の露地栽培が始まり、昭和60年代に加温機の導入とともに、「黒陽」の促成栽培が始まりました。平成6年に、品質向上を目的として、全面的に「筑陽」

に切り替わり、主に和水町・南関町・玉名市・天水町管内で生産が続いています。令和元年のナス専門部会員は夏秋162名、ハウス53名で、共販面積35.8haでの栽培です。多くの方が稲作との複合経営で、ナス栽培の省力化は大きな課題でした。

冬春の作型は8月中旬〜9月上旬に定植し、10月上旬から7月上旬(共販稼働期間)まで収穫されます。株間は65cmで、10a当たり植え付け本数は800本が基準。主枝と側枝の4本仕立てが基本ですが、V〜U字型の誘引のほか、採光性のよい当地独特の垣根3本仕立栽培もみられます。





← 良作には葉面散布に加え発根剤も欠かせないという田中さん。ナス栽培は常に水が必要で根腐れが起こりやすく苦土欠をどうやって抑えるかが鍵という。その理由は、ナスは葉から果実へ直接養分が還流せず、根を経由するからと説明する。

↑ 天井が高く点滴灌水チューブを備えたハウスでは遮光もされ、37℃の室温にはなるものの8月頭から作業が可能だという。JAたまな指導販売部天水地区木下翔馬さん(右)と。

に処理するといった着花の選択や、一芽あるいは二芽残しの判断ができませんでした。すべて着果する「PC筑陽」ではそうした判断は不要となります。「PC筑陽」の草勢維持に関して、「筑陽」では、1番果をしっかり成らせて収穫することで真つすぐ上に伸びてしまわないよう初期草勢を抑えていましたが、「PC筑陽」では逆に1番花を摘花して草勢がつくよう管理しています。さらにこれまでの4本仕立てから左右1本2本を交互に繰り返すチドリ3本仕立てに変更。その分、株間45cmから40cmに狭めることで反当たりでは10株多い計算となり、枝数で考えれば4本仕立て時とそんなに収量が見込めます。この3本仕立ては思わぬメリットも生まれました。これまで4本目にどの枝を誘引するか研修生には判断が難しかったのですが、3本目までの側枝はきれいにるので判断がつき、管理が手遅れになることがなくなりました」

収量と太りの両方を求めている3本仕立てへの変更だという田中さん。環境の整った設備を生かして8月上旬から耐候性パイプハウスでの定植がスタートします。4年前に導入した養液土耕で液肥と灌水をコントロールし、炭酸ガスも7年前から取り入れている田中さんの目標収量は反当たり22tです。「ハウスを増やすため、単為結果は経

## J Aたまな南関郷地区で開催された圃場巡回による勉強会の様子

タキイ技術員から中後期厳寒期からの管理ポイントとして、温度設定は14℃目安で保温し実温で12℃を切らないこと。採光性を上げる摘葉をしたいところだが、厳寒期は過度な摘葉は草勢を低下させるので注意が必要で、葉枚数を確保するため遅めに開始し、懐で重なる内向きの本葉から摘葉すること。側枝は収穫後1芽切り戻し1葉摘芯が基本だが葉数が減る厳寒期は2枚残しや二芽切り戻しも検討することなどが確認された。



↑ 出荷箱を手にJAたまな指導販売部南関郷地区園芸指導販売班長の本田吉之助さん。



↑ 津留克幸さんハウスにて。右から2番目が伊藤信英冬春ナス専門部会北部支部長。

← 片山幸次さんハウスの垣根3本仕立て。

営にメリットだと思って切り替えました。最も期待するところは秀品率と収量の向上ですが、見逃せない特長としてとげなしという点もあります。収穫物をコンテナへ移す際、研修生が表面の傷を気にしなくてよく、作業効率が高まっています」

8haの稲作と並行して年中手がかかるということから、できれば箱詰めを

なくしたいとの思いも。9、10月の1日の誘引作業の遅れは、1週間の収穫開始のずれにつながると思います。「PC筑陽」だけでなく天敵農薬や養液土耕システム等の導入で、「いかに休める時間をつくれるか」と話す田中さん。

令和時代の若き農家は理想の形を目指してすでにスタートしています。